

「思うことなど」

(教育・昭和46年卒) 村山美恵子

「自分は運動が苦手」と思っていたのは、中学1年生の時の苦い経験からでした。

担任の先生が顧問をしていたという単純な動機で、バレーボール部に入っただけです。当時は社会全体が、それほどスポーツ熱が高いとは言えない時代でしたし、誰かのようにになりたいという憧れや目標もなく、漠然と練習に参加していました。

体育館がなく、炎天下での練習は、何とも言えず苦しかったです。

何人かいた1年生の中で、ずば抜けて身長の高いKさんは、バレーの技術も上手く、先輩達に交じって試合にも出て活躍していました。時々貧血をおこしていた私は、コートの外で練習を見学しながら、Kさんに対して少なからず劣等感を持ち、言葉遣いの荒々しい先輩達の中になかなか入っていかず、少しずつ暑い運動場から足が遠のいてしまったのです。

退職後、健康のためにと、知人に誘われたインディアカ。

何十年も昔の苦い経験が頭をよぎりました。私にできるのだろうか。人間関係はうまくいくだろうか、などと心配しながら、1週間に1回の練習に参加してみました。

あれから、もう5年以上続いています。

年齢層が50代から80代と幅広く、お互いを思いやる言葉が常にコートに溢れていて、少々失敗しても、それを包み込んでくれるユーモアやおおらかさがあり、とても居心地の良い時間です。

時々孫を連れてくるOさん、夜勤明けだと言いながらとてもエネルギッシュなNさん、早朝に果樹の予防をしてから来るTさん、家族の介護をしているIさん、80代で家族全員の食事を作っているGさん、いちご農家の手伝いをしているMさん、ボランティア活動で忙しいYさん・・・などなど。

新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言が解除され、練習が再開されました。それぞれが、それぞれの人生を抱えて、1週間に1回の練習を2時間たっぷり行うのです。お互いの生活が垣間見える休憩時間の雑談も、エネルギー補給には欠かせません。精いっぱい生きているから、皆の周りには、こんなにも清々しい風が通り過ぎていくのだと感じつつコートに向かいます。

運動できることの楽しさをかみしめながら・・・。